

〈食〉の差異が、差異の表象を生むまで

— ユダヤ教の食事規定に着目して —

小 田 雄 一*

1. はじめに
2. カシュルートをめぐる
3. 食の差異—— 血を食べてはならない
4. 儀式殺人—— 差異が表象のなかへ
5. むすび—— 根拠のない表象が、「現実感」をもつのはなぜか？

1. はじめに

それなる商人の肉一ポンドは、お前のものである、法廷はこれを認め、法によってこれを与える。

……だが、ちょっと待て！ まだほかに言うことがある。

この証文には血は一滴たりとも与えるとは書いていない。

文面にははっきりと「肉一ポンド」とある。

いいか、証文どおりに切り取るに当たって、キリスト教徒の血を

一滴たりとも流すにおいては、お前の土地、財産は、

ヴェニス法律によって、ヴェニスの国家へ没収する。

(Shakespeare 1908 = 1967: 307)

『ヴェニスの商人』のなかで、シェイクスピアが、ユダヤ人シャイロックを高利貸しとして描き、そうしたイメージが当時のヨーロッパ社会に深く根を張っていた反ユダヤ主義の典型的な人種表象であるとして言及されることは今でも多い。冒頭で引いたセリフは、『ヴェニスの商人』のなかで、ユダヤ人シャイロックが、期日までに借金を返済できなかったヴェニスの商

* おだ ゆういち 京都大学大学院農学研究科

人アントーニオに、借金の担保にしていたかれの体の肉一ポンドを要求するという、物語のクライマックスとして有名な「人肉裁判」の場面である。この場面にふれる読者のまえには、異様なまでに金に執着する冷血なユダヤ人像がおのずと浮かんでくることだろう。〈金〉とユダヤ人——現代においても連綿と続くこうしたユダヤ人表象を取り上げることもまた、きわめて興味深かつ難しいテーマではあるが、ここで考えていきたい表象は、また別のところにある。上で引いたセリフのなかには、あまり知られていないもう一つの表象がたしかに存在している——それは〈食〉とユダヤ人に関わるものである。古くから読み継がれているこの作品を、そうした視点から眺めてみれば、ひじょうに奥深いものが浮かび上がってくる。

ふたたび小説を見てみよう。隠されたもう一つ別の反ユダヤ主義的な表象とはどのようなものか？「それなる商人の肉一ポンドは、お前のものである、法廷はこれを認め、法によってこれを与える」。アントーニオには自らの体の肉をシャイロックに切り取られてしまう危機が、あわやそこまで差し迫る。しかし、裁判官に扮するポーシャの次のような機転によって、見事に窮地を救われることになる。「この証文には血は一滴たりとも与えるとは書いていない。文面ははっきりと「肉一ポンド」とある」。契約に担保としていたのは「肉」だけで、「血」は担保としていない。肉を切り取るのはいいだろう。ただし、血を一滴も流してはならない、という具合にである。この「血」と「肉」という要素が、もう一つ別のかくされた反ユダヤ主義的な表象を読み解く糸口となる。それを理解するには、ユダヤ教の食事規定に関する知識がいくらか必要になってくるが、それは後に詳しく述べることにする。いかにして〈食〉が、反ユダヤ主義を生み出す要因となっていたのか。それは、本稿が問題とする中心部に繋がっている。

本稿の目的は、ひろく捉えれば、食の差異が、ある種の差異の表象を生み出していくプロセスを考察するということにある。異なる食習慣は、しばしば異なる〈人間〉の表象を生み出し、それらはいきおい差別と結びつくことがある。現代においても、〈食〉と人種主義が結びついている例をわれわれが思い浮かべることは、そう難しいことではない。もちろんここでは、人種主義のなかでも反ユダヤ主義を取り扱う。反ユダヤ主義は、古代から現代にいたるまで連綿とつづく人種主義の一つの典型例と言えよう。また一方の食習慣に目を向ければ、ユダヤ教のなかにはカシュルートと呼ばれる特異な食事の規定が存在する。なぜ〈食〉が人種主義の誘因となるのか、つまりここでは、なぜカシュルートが反ユダヤ主義を生み出す機縁となってしまったのか、主にそこに光を当てることになるはずである。ひとまず、そのユダヤ教の食事規定カシュルートを取り上げて詳しく見ていくことにしたい。

〈食〉の差異が、差異の表象を生むまで（小田）

2. カシュルートをめぐって

ユダヤ教には、現在においても、厳格さをきわめる食事についての規定が存在している。カシュルートの *חֻלּוּת* とよばれる、この食事規定は、ユダヤ人の生活を、長きにわたって規定しつづけてきた¹⁾。

カシュルートとは、もともと「適切さ」を意味するヘブライ語であり、そこから、どのような食べものがユダヤ教にとってふさわしいかを示す規定それ自体を意味するようになっている。また、カシエル *כּוֹשֵׁר* (kosher)²⁾ とは、「適切な」を意味するヘブライ語形容詞であったが、いまでは、カシュルートにのっとり具体的な食事をさすようになっている。いまもエルサレムを歩けば、*כּוֹשֵׁר* というマークの入った飲食店の看板を、頻繁に目にするはずだ。ユダヤ教徒は、なにかを食べるばあい、それがカシエルかそうでないかを、たえず気にしなくてはならない。だが、カシュルートやカシエルということばが「適切」という意味から来ていることからわかるように、本来、とくに食事についてだけを規定しているわけではない。その他のものといえば、とくに身につけるもの、肌にふれるもの、体のなかに入れるものなど、身体とかかわる規定がかなりの量を占める。具体的には、儀式につかわれる祭具や服装、また、薬、化粧品、洗剤、掃除用品などがある。それだけではなく、近年ではカシエルな携帯電話が発売されたり、デートなどでも、カシエルなものかそうでないか、といった多種多様な使われ方をすることもある。つまり、このカシュルートとは、本来は、日常のあらゆるものについて、ユダヤ教がさだめるところの規定を意味している。それは、ユダヤ教が、人間のおこないすべてを規定する宗教であることと深いかわりがある。カシエルということばは、ひろくとれば、ユダヤ教徒にとって、「それが宗教的にふさわしいものである」ということを意味していると考えてよい。そうは言っても、イスラエルにおいて、カシエル kosher といえば、食事にかんするものが目立っており、また、ユダヤ人に聞いても、一般的には食事にかんするものであると考えられている。

ユダヤ教は、イスラームと同じように、生活のすべてを宗教によってさだめており、そのような広義の宗教法規をハラハーとよぶ。これは、ヘブライ語の「歩む」という動詞から作られた概念である。カシュルートは、そのような宗教法規の一部を成すものであると考えてよい。そのような法規は、法源をもとに法を編み上げられる法曹法である。そして、法源は、いうまでもなくかれらの聖典であるところのタナハである（タナハとは、いわゆる旧約聖書であるが、これは、キリスト教徒からみた呼称であるので、かれらは、そう呼ばない）。法源は大きくわけて、成文律法と口伝律法の2つがある。成文律法とは、具体的には、モーセ五書（創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記）のことであり、一字一句たりとも変更をくわえることは許されない。

一方の口伝律法は、神からモーセ→ヨシュア→長老→預言者→ラビなどへと連綿と続く伝承であり、これらは伝達されるだけでなく、その時代ごとにおこる新たな事態に対処する新しい規定までも含んだものであり、可塑性をもっている。ソリッドな部分とリキッドな部分、これら異なる性質をもつ2つのテキストをもって、ユダヤ教は、長きにわたって、その信仰を生きのびさせてきた。ユダヤ社会が、古代から様々な社会で生き残ってこられたのは、時代に合せる柔軟性があったからであると言われている (de Lange 2003 = 2004: 124; 市川 2004: 257 - 63)。

後者の口伝律法は、口伝と表現されているものの、喪失への危機感から2世紀末に、複数のラビによって書物として記述され成文化され、これらはミシュナとよばれている。また、ミシュナにつけられた注釈のことをゲマラーとよび、ミシュナとゲマラーを合わせたものをタルムードとよんでいる。このタルムードの特質として、引用テキスト (たとえばミシュナの一句を置き、その下に解釈としてのゲマラーがつづく) の周りを、注釈が取り囲む独特の記述法があげられる。「閉じることのない」テキストだと言われている。このタルムードにかんする思考法は、



写真1 カシエル・マーク

ユダヤ人の思考に強い影響を未だにもたらしていると言われている。じっさい、タルムードを学ぶイエシュバ (神学校) では、「答え」よりも「質問」を重視する伝統がある。

このようなタルムードの解釈学の営為は、現在もラビによって続けられている。カシュルートは、このような法源をもとに、ユダヤ教の内在的ロジックによって編み上げられる。一般のユダヤ教徒は、カシエルかどうかをどのように、確かめるかといえば、お店の看板を見て、カシエルかどうかと判断することもあれば、食料品を買うときに、商品に貼り付けられている、写真1のようなカシエルのマークを見て判断する。このようなマークは、ラビたちが生産から加工・流通などを審査して合格すれば発行する。上で見たように、カシュルートを編み上げるには、解釈作業が欠かせないので、ラビによってブレが生じる。ユダヤ教には、宗派がたくさんあり、ラビも複数いるので、それを反映して、このマークが林立することになる。個々のユダヤ教徒は、みずからが従うラビ、もしくはお気に入りのマークを覚えていて、それらを選んで、食べものを買うのである。

〈食〉の差異が、差異の表象を生むまで（小田）

3. 食の差異——血を食べてはならない

この食事規定のなかには、こまごまとしたルールが非常にたくさん存在しているが、本稿では、規定のなかでも、とりわけ重要である「血を食べてはならない」という禁忌を見ていかねばならない。ユダヤ教が定める「食べてはならないもの」のなかで、「血を食べてはならない」という禁忌がとりわけ重要なものには理由がある。

ユダヤ教において、「食べてよいもの」は、「適切」を意味するカシェル *kosher* (כשר) ということばであらわしていた。とすると、もう一方の「食べてはならないもの」は、素朴に考えれば、「不適切」やそれに近いものを意味するヘブライ語になりそうなものである。だが、そうでないことが、宗教的位相の深層へわれわれの思考を導くことになる。

ユダヤ教は、食べてはならないもののことを、テレファ *trefah* (תרפה) とことばであらわしている。これは、ヘブライ語では、もともとは、「ひき裂かれたもの」という意味である。

「引き裂かれたもの」ということばが、なぜ、「食べてはならないもの」を、意味するようになったのだろうか。この、ことばの変化の由来をなぞることで、古代イスラエルにおける宗教の思考の一端に、わずかなさぐりを入れてみよう。ここでは、聖書のなかに直接分け入ることが、最短である。

「あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならなければならない。あなたがたは、野で裂き殺されたものの肉を食べてはならない。」³⁾

「祭司は、鳥でも獣でもすべて自然に死んだもの、または裂き殺されたものを食べてはならない。」⁴⁾

「すべて自然に死んだものは食べてはならない。」⁵⁾

これらの記述から分かるように、「ひき裂かれたもの」とは、獣にかみ殺された動物の死肉などのことを、もともとは指していた。ユダヤ教において、何ものかによって、ひき裂かれ、死んでしまった動物の肉は食べてはならないとされている。また、エゼキエル書が、「裂き殺されたもの」と並置するかたちで示している「自然に死んだもの」、自然死した動物の肉も、ユダヤ教においては食べてはならない。

つまり、どのような宗教的思考が古層に隠されているかといえば、人間が動物の肉を食べるとき、かならずそこに、人間の手を経て殺されるというプロセスが必要であると古代イスラエ

ルの宗教は考えていた、ということである。より正確に言うならば、狩人などに殺された動物の肉も、食べてはならないとされていることから、たんに人間の手を経るということだけが重要なのではない。重要なことは、一定の仕方によって屠られる、殺されるということである。

整理しておこう。テレファ *trefah* (תּרֵפָח) ということばは、もともとは「ひき裂かれた」というヘブライ語であり、それが、「定められた屠畜を経ていない」ことを含意し、それこそが、ユダヤ教において、「食べてはならないもの」全体を指すようになっていたのである。とするならば、ここで、ユダヤ教の食事規定が屠畜というおこないを、きわめて重要なものと考えているだろうということが、われわれには見えてくる。

うえで見てきたように、ユダヤ教が定める「食べてはならないもの」テレファ *trefah* (תּרֵפָח) ということばのなかには、「屠畜を経ていない」という意味が含まれていた。そこから、ユダヤ教においては、屠畜というおこないが、きわめて大きな役割をはたすであろうことが想像できる。実際、ユダヤ教は、みずからが定めるところの特殊な屠畜方法をへたものでない動物の肉を、食べることを禁じている。

さらに屠畜という一連のおこないのなかで、ユダヤ教が、もっとも重視しているのが〈血〉の扱いなのである。ふたたび聖書に立ち返ろう。

「肉を、その命である血のまま、食べてはならない。」⁶⁾

「あなたがたは脂肪と血とをいっさい食べてはならない。」⁷⁾

「鳥にせよ、獣にせよ、すべてその血を食べてはならない。だれでもすべて血を食べるならば、その人は民のうちから断たれるだろう。」⁸⁾

「血を食べるならば、わたしはその血を食べる人に敵して、わたしの顔を向け、これをその民のうちから断つであろう。」⁹⁾

聖書においてくりかえされる禁止は、「血を食べてはならない」というものである。そうである以上、ユダヤ教の屠畜において、まずこころみられることは、〈血〉と〈肉〉を分けること、〈血〉を注ぎだすことである。

つまり、具体的に「血を食べてはならない」という規定が、どのように実践されるかという点、まずは、屠畜作業における「放血」といったかたちで現れてくるのである。その屠畜方法はシェヒター *shehita* (שְׁחִיטָה) といい、その行為は高位の宗教者であるショヘット *shohet*

〈食〉の差異が、差異の表象を生むまで（小田）

(טורח) とよばれる特殊な屠畜人にしか、許されていない。かれらショヘットは、資格制であり、ラビがおこなう理論と実践にわたって厳しい試験に合格せねばならない。そして、教養と宗教的敬虔さが、かれらには求められる。その屠畜作業においては、〈血〉を注ぎだすため、生きたまま、動物の喉を一気に掻き切り、放血することが重視されている。そうしてつくられた肉を買って、家庭にもって帰った後でも、冷水に浸け、塩もみし、傾斜のついた板の上しばらく載せて、血を取り除くといった作業が、規定によって定められている。このように、ユダヤ教徒においては、徹底的に血を食べることを儀礼的に避けようとしている。

「食べてはならないもの」を意味するヘブライ語テレファ *trefah* (טרפה) ということばが、もともとは「ひき裂かれたもの」つまり「定められた屠畜を経ていない」ことを含意し、その根幹に血を注ぎだすことがあるのであるから、「血を食べてはならない」という禁忌が、食物禁忌のなかで、とりわけ重要なものとなる理由がおのずから浮かび上がってこよう。

ユダヤ教の特殊な屠畜作業シェヒター *shehita* (שחיטה) は、ひじょうに詳細な過程が定められているのだが、われわれはその屠畜行為がいかに細部にまで規定されているのかを知るために、そのなかでも最も重要な5つの規制を取り上げ、見ておこう。ここではこの規則に言及しているレビンガー (Levinger 1995: 15) に依拠しながら、それを確認する。これら5つの規制のうち、一つでも欠ければテレファとなることは言うまでもない。

- ① シャヒヤ *Shehiya*：切開にあたって、一瞬のためらいも許されない。一息で切らねばならない。
- ② デラサ *Derasa*：屠畜用のナイフ (*sakin / chalaf*) は、家畜の首に押しつけたり、叩き切るようにしてはならない。あくまで、素早く滑らかに切らねばならない。首を切り落としてはならない。
- ③ ハラダ *Chalada*：切開のあいだ、このナイフが、牛の皮膚や、羊の毛、鳥の羽によって、覆われて見えなくなってしまうてはならない。つねに、ナイフの全体が見えて作業ができるようにせねばならない。(それゆえ、ナイフは、十分な幅が求められる。)
- ④ ハグラマ *Hagrama*：切開は、首の決められた箇所でしかおこなってはならない。気管がある喉元の中央あたりにおいてである。首の低すぎる位置でもいけない。筋肉が厚く、気管が隠れているからである。
- ⑤ イクール *Ikkur*：裂開ではなく切開でなくてはならない。つまり、裂くのではなく、きれいな切り目を入れねばならない。

4. 儀 式 殺 人 —— 差異が表象のなかへ

このような〈血を食べてはならない〉という特殊な規定、またその規定によって定められる家畜から生きてまま血を抜き取る行為によって、ユダヤ人にまつわる表象が産み出され、さまざまなヴァリエーションと移り変わりを見せながら、今なお存在しつづけている¹⁰⁾。冒頭で見た『ヴェニスの商人』のクライマックスである「人肉裁判」のくだりをふたたび見てみよう。

それなる商人の肉一ポンドは、お前のものである、法廷はこれを認め、法によってこれを与える。

……だが、ちょっと待て！ まだほかに言うことがある。

この証文には血は一滴たりとも与えるとは書いていない。

文面にははっきりと「肉一ポンド」とある。

いいか、証文どおりに切り取るに当たって、キリスト教徒の血を

一滴たりとも流すにおいては、お前の土地、財産は、

ヴェニスの法律によって、ヴェニスの国家へ没収する。

(Shakespeare 1908 = 1967 : 307)

ここまで見てきたわれわれには明らかだが、これは、ユダヤ人たちが頑固に守っているカシュルート（Kashrut）をキリスト教徒の立場から揶揄しているのである。お前たちユダヤ人は、いつも肉のなかから血を抜いている。お前が今日、肉を切りとるのはよいだろう。ただし、血を抜かず肉だけ切りとってみろ、という具合にである。シャイロックは、『ヴェニスの商人』のクライマックスで、カシュルートの極めて重要な「肉を残して血を取りだす」行為を反転させ、ユダヤ教の根幹にかかわる食事規定をからかっているのである。ちなみに最後にシャイロックは、ユダヤ教を棄てて、キリスト教徒に改宗させられる。これは、深い次元での「反ユダヤ主義」的な作品なのである。

また、『ヴェニスの商人』には、人肉裁判のなかで、あわや、アントーニオの肉が切り取られてしまいそうになる場面に、つぎのようなくだりがある。

何故そう一生懸命にナイフをといでいるんだ？

(Shakespeare 1908 = 1967 : 304)

すでにふれたユダヤ教における特殊な屠畜人ショヘットは、屠畜作業シェヒターをおこなうにあたって、きわめて入念にナイフを研ぐことが規定のなかで定められており、かれらの使うナイフには、刃こぼれや凹み、わずかな傷さえあってはならないとされている。何度も何度も、ナイフを研ぎながら、定められたやり方で、爪先で刃をなでるようにして鋭さを確かめるショヘットの姿は、見る者に、独特の印象を与える。シャイロックが人肉裁判のなかで熱心にナイ

〈食〉の差異が、差異の表象を生むまで（小田）

フを研ぐすがたは、ショヘットと重ねられていることは明らかである。

ユダヤ教におけるこの屠畜は、キリスト教社会で、独特の表象を産み出すことになる。ユダヤ教の最大のお祭りに「過越し祭 passover」というものがあるが、その日に、ユダヤ教徒たちがキリスト教徒の子どもをさらって、その血を儀式的に抜き取って、食べている。そのような風説がまことしやかに囁かれるようになる。これが「儀式殺人」と呼ばれるものである。このようなユダヤ人表象は、中世のヨーロッパ社会で伝染病のように広まり、そのような妄想に、ときに、ひとびとが、取り憑かれたようになることがあった。実際、これをきっかけとして、多くのユダヤ人が虐殺されてしまう¹¹⁾。もともと「過ぎ越し祭」とは、神が、初めての子どもを犠牲にするという理不尽な災いが、子どもの身代わりとして子羊を犠牲にし、血を注ぎだし、家の戸口にその血を塗れば、神の災いが過ぎこすというところに、名まえの由来がある¹²⁾。それゆえ、このお祭りの日には、ほんらい屠畜が、重要な位置を占めていた。

そして、次の点が重要なのであるが、イエスが犠牲になるのも、この過ぎ越し祭の日なのである。ユダヤ教の子羊の犠牲にイエスの犠牲が重ね合わせられ、ここにおいて、ユダヤ教の内在的ロジックを突き破るかたちで、ユダヤ教のなかからキリスト教が産み出してくる。とすると、この「儀式殺人」の表象は、イエス殺害のトラウマ的反復であったと考えることができよう。過ぎ越し祭における、食の差異、それにまつわる儀礼的屠畜が、このようなキリスト教社会の深い次元に触れるものであり、キリスト教徒はそうした自己のトラウマをユダヤ教徒に投影し、嫌悪してきたのである。

5. む す び—— 根拠のない表象が、「現実感」をもつのはなぜか？

本稿は、ユダヤ教の食事規定カシュルートを取り上げ、そのなかに含まれる「血を食べてはならない」という重要な規定、またそれを遵守するために不可欠な屠畜が、キリスト教社会で独特の表象を産み出す過程をあらまし見てきた。ここでは、これまでで得た知見をもう少し普遍的な問題へと接続できるよう、抽象的な次元で考えてみたい。

われわれの生きる世界には、素朴な「差異」がありふれて存在している。そして、これら「差異」が世界に存在することを、われわれは、当たり前のこととして知っている。これらの「差異」を、われわれはどのように認識するかといえば、まずもって身体によって認識する。この位相で認識している差異は、きわめて感覚的で生々しい差異である。これを仮に「事実に差異」と呼んでおこう。本稿ですでに取り上げたものでいえば、食の差異はこのなかに入るであろう。

さらに、われわれはたんなる感性的な存在ではなく、知性や想像力をもった存在でもある。

ここからが、表象の出番となってくる。われわれの認識において、うえの事実的差異は、もちろん素朴な事実的差異のままでありつづけることはなく、表象をへることによって、イメージの領域へ投げ入れられることになる。これをひとまずまた「想像的差異」と呼んでおこう。そして、それはもはや身体的・経験的地平を越え出ているために、改変、増殖し、また、拡大、再生産されていく可能性をもつ。

そして最後に、そうした想像上の差異を、身体は、もともとの事実上の差異と取り違えてしまう。それは、われわれが身体的存在であるのと同時に、もう一方で思弁的な存在であるというありようがここでは深く関連している。表象は、身体的経験を一度ははなれ、自己増殖していく思弁的なものであるにもかかわらず、また再び身体に回帰し、感覚に訴えかける力をもつ。表象から与えられた差異に、われわれの身体は感応せずにはいられない¹³⁾。このことによって、思弁によって身体という根拠をもたなくなったはずの表象が、いつのまにか再び身体化されてしまうのである。だからこそ、根拠のない表象が、われわれのまえでリアリティをもつことがあるのである。

- ① 事実的差異：集団間の差異を、身体によって生々しく意識。
- ② 想像的差異：①が、表象をへることによって、イメージの領域へ。改変、増殖、定着。
- ③ 誤認的差異：②の想像上の差異を、身体は、事実上の差異と取り違えてしまう。

われわれが、歴史を通じて猛威をふるってきた表象を、無知な人々によるたんなる偏見の産物に過ぎず、理性の光によってそうしたものを除去できると考えるならば、それは表象が生み出す粘着的な誤謬の構造に気づくことができず、時をかえて、また再び、われわれは同じ錯誤に陥るはずである。むしろ、そうした表象は、われわれの知のありようと深く結びついていることを見据えねばならない。

注

- 1) 2003年1月16日にフロリダから打ち上げられたスペースシャトル・コロンビア号に搭乗した、イスラエル初の宇宙飛行士イラン・ラモンは、シャトル内でとる宇宙食をすべてカシュルートの則ったものとしたことで知られている。同機は、同年2月1日、テキサス州上空で、空中分解した
- 2) כשרות については、英語表記が kashrut であり、日本語で「カシュルート」という表記が定

〈食〉の差異が、差異の表象を生むまで（小田）

着している一方，כשר にかんしては，英語表記が kosher であり，このことばがひろく広まっていることもあって，日本語で発音・表記するばあいにも，英語での発音・表記に影響をうけ，コシャー，コーシャ，コシエルなど，ふれがある。本稿では，日本ユダヤ学会（ヘブライ語カナ表記委員会，2008.1.18）が提示する音韻論に準拠したミニマルな表記に従う。

- 3) 出エジプト記 22 章 31 節
- 4) エゼキエル書 44 章 31 節
- 5) 申命記 14 章 21 節
- 6) 創世記 9 章 4 節
- 7) レビ記 3 章 17 節
- 8) レビ記 7 章 26-27 節
- 9) レビ記 17 章 10 節
- 10) さまざまなヴァリエーション，またその他のユダヤ人表象にかんしては，エドゥアルト・フックス，『ユダヤ人カリカチュア——風刺画に描かれた「ユダヤ人」』1921，羽田功訳（柏書房，1993）に詳しい。
- 11) Magdalene Schultz, “The Blood Libel: A Motif in the History of Childhood,” *The Blood Libel Legend*, ed. Alan Dundes によれば，1095 年の第一次十字軍遠征以前には見られなかったとあるが，古代にさかのぼるまで，類似の表象は存在している。なお，この表象は，現代にいたるまで，かたちを変えて産み出され続けている。
- 12) 出エジプト記 12 章 14 節
- 13) ここで，主要な役を演じているのは，「視覚」であるが，このことについての踏み込んだ考察は別稿にゆずりたい。ここであらためて，身体がもつ感覚の権力秩序を踏まえ，視覚が集権的な力をもっている点を指摘しておいてよいだろう。

文 献

- Bourdieu, Pierre, 1979, *La distinction: Critique Sociale du Jugement*, Paris: les Editions de Minuit. (= 1990, 石井洋二郎『ディスタンクション 社会的判断力批判 I』藤原書店.)
- Buber, Martin, 1952, *Die Chassidische Botschaft*, Heidelberg: Lambert Schneider. (= 1997, 平石善司訳『ハシディズム』みすず書房.)
- Calvin, Jean, 1961, *Institution de la religion chrestienne*, Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 245-496. (= 1965, 渡辺信夫訳『カルヴァン・キリスト教綱要IV/2』新教出版社.)
- Darby, W. J., P. Ghalioungui, and L. E. Grivetti, 1977, *Food: The Gift of Osiris, 2 vols*, London: Academic Press.
- de Lange, Nicholas, 2003, *Judaism*, 2nd ed, Oxford: Oxford University Press. (= 2004, 柄谷凜訳『ユダヤ教とはなにか』青土社.)
- Douglas, Mary, 1966, *Purity and Danger: An Analysis of Concepts of Pollution and Taboo*, London: Routledge & Kegan Paul. (= 1995, 塚本利明訳『汚穢と禁忌』思潮社.)
- Dresner, Samuel H. and Seymour Siegel, 1966, *The Jewish Dietary Laws*, New York: The Burning Bush Press.
- Elias, Norbert, 1969, *Über den Prozess der Zivilisation*, Bern: Francke Verlag. (= 2004, 赤井慧

- 爾・中村元保・吉田正勝訳『文明化の過程（上）新装版』法政大学出版会。）
- Epstein, I., ed. 1948, *Seder Kodashim: II (Hullin)*, trans. E. Cashdan, London: Soncino Press.
- Flandrin, Jean-Louis and Massimo Montanari dir., 1996, *Histoire de l'alimentation*, Paris: Fayard. (= 2006, 宮原信・北代美和子監訳『食の歴史 II』藤原書店.)
- Grievetti, L. E., and R. M. Pangborn, 1974, "Origin of Selected Old Testament Dietary Prohibitions," *Journal of the American Dietetic Association*, 65: 634-8.
- Grunfeld, D. I. 1972, "Dietary Laws Regarding Forbidden and Permitted Foods, with Particular Reference to Meat and Meat Products," *the Jewish dietary laws*, vol. 1.
- 羽田功, 2006, 「ユダヤ人イメージ——ヨーロッパにおけるユダヤ人像の特質」羽田功編『民族の表象——歴史・メディア・国家』慶應義塾大学出版会, 2-39.
- 芳賀力編, 2008, 『まことの聖餐を求めて』教文館.
- Harris, Marvin, 1985, *Good to Eat: Riddles of Food and Culture*, New York: Simon & Schuster.
- 柘晚生, 2006, 「『食べてはいけない』（旧約）から『取って食べなさい』新約へ」『紀要』藤女子大学キリスト教文化研究所, 7: 37-70.
- Husserl, Edmund, 1936, "Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie: eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie," *Philosophia*, Bd. I. (= 1995, 細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社.)
- 市川裕, 1988, 「タルムード期のユダヤ思想」『岩波講座東洋思想第1巻——ユダヤ思想1』岩波書店, 230-312.
- , 2004 a, 「歴史としてのユダヤ教——ユダヤ人であることからくる歴史意識」池上良正他編『岩波講座宗教 第3巻——宗教史の可能性』岩波書店, 131-57.
- , 2004 b, 『ユダヤ教の精神構造』東京大学出版会.
- 井上良作, 1999, 「後期ルターの聖餐論研究——Real Presenceの問題に関して」『神学』東京神学大学神学会, 61: 131-57.
- 井上琢也, 2002, 「失神していない牛は痛みをどれだけ感じるのか——『儀式畜殺』（Schachten）禁止をめぐる1920年代後半のバイエルン議会での議論を追って」『國學院法學』39（4）: 1-34.
- 伊藤英志, 2007, 「エマオの食卓へ——ルカ福音書における食卓の位置と意義」『紀要』東京神学大学総合研究所, 10: 113-34.
- 川田順造, 1995, 『ヨーロッパの基層文化』岩波書店.
- 加山久夫, 1996, 「食卓の共同体としての教会——ルカ文書における普遍主義の象徴としての食事」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』29: 5-22.
- 木寺廉太, 1975, 「初期キリスト教における食物規定——『使徒規定』（使徒行伝15章29節）の歴史の変遷」『宗教研究』49（1）: 1-23.
- 小林信雄, 1980, 「マルコ福音書における供食物語——聖餐の起源との関わりにおいて」『神學研究』関西学院大学神学研究会, 28: 19-55.
- 小原克博, 1998, 「身体論に関する神学的考察」『基督教研究』59（2）: 147-68.
- 熊野健, 1989, 「供犠論再考——供犠論の象徴論的再生を求めて」『年報人間科学』10: 145-61.
- 共同訳聖書実行委員会, 1996, 『聖書 旧約統編つき——新共同訳』日本聖書協会
- Kuper, Jessica, 1977, *The Anthropologists' cookbook*, London: Routledge and K. Paul. (= 1983,

〈食〉の差異が、差異の表象を生むまで (小田)

- 石毛直道・山下諭一訳 『人類学者のクッキングブック』 平凡社.) Levin, S.I., and E. A. Boyden, 1940, *The Kosher Code of the Orthodox Jew – Being a Literal Translation of the XVI-century Codification of the Babylonian Talmud Which Describes Such Deficiencies as Render Animal Unfit for Food (Hilkot Terefot., Shulhan' Aruk); to Which is Appended a Discussion of the Talmudic Anatomy in the Light of the Science of its Day and of the Present Time*, New York : Hermon Press.
- Levinger, I. M., 1995, *Shechita in the Light of the Year 2000: Critical Review of the Scientific Aspects of Methods of Slaughter and Shechita*, Jerusalem : Maskil L'David.
- Lipschutz, Rabbi Yacov, 1988, *Kashruth : A Comprehensive Background and Reference Guide to the Principles of Kashruth*, New York : Artscroll Mesorah.
- Maimonides, Moses, 1956, *The Guide for the Perplexed, 2nd edition*, trans. M. Friedländer, London : Soncino Press.
- , *Sefer ha-mitzvoth*, trans. C. B. Chavel. 2 vols, London : Soncino Press.
- Mauss, Marcel and Hubert, Henri, 1899, "Essai sur la nature et la fonction du sacrifice," *L'Année sociologique*, 2 : 29 – 137. (= 1983, 小関藤一郎訳『供犠』法政大学出版局.)
- , 1908, "Introduction à l'analyse de quelques phénomènes religieux," *la Revue de l'histoire des religions*, 58 : 162 – 203. (= 1983, 小関藤一郎訳『供犠』法政大学出版局.)
- 三浦雅士, 1994, 『身体の零度 —— 何が近代を成立させたか』講談社.
- 六車由美, 2003, 『神人を喰う —— 人身御供の民俗学』新曜社.
- 村山盛章, 2006, 「第一コリント書におけるパウロの論敵についての一考察 —— 社会的, 文化的視点から」『基督教研究』同志社大学, 68 (2) : 58 – 77.
- 中野実, 2005, 「イエスの『清め』理解 —— その時代史, 宗教史的位置づけについて」『紀要』東京神学大学総合研究所, 8 : 139 – 49.
- Noth, Martin, 1978, *Das dritte Buch Mose: Leviticus 4 (Das Alte Testament Deutsch 6)*, Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht. (= 2005, 山我哲雄訳, 『ATD 旧約聖書註解 (3) レビ記』ATD・NTD 聖書註解刊行会.)
- 沼野充義編, 1999, 『ユダヤ学のすべて』新書館.
- 小田亮, 1990, 「《穢れ》と賤視 —— 《浄め》の社会的分業について的人类学的考察」『国際文化論集』1 : 37 – 66.
- 岡崎宏樹, 1995, 「交流の共同体と合一の共同体 —— バタイユとジラルールの供犠論の比較から」『ソシオロジ』39 (3) : 3 – 21.
- 大貫隆, 2003, 『イエスという経験』岩波書店.
- 小友聡, 2007, 「死すべき者の救済 —— コヘレトの『飲み食い』」『紀要』東京神学大学総合研究所, 10 : 97 – 111.
- Preuss, Julius, 1978, *Julius Preuss' Biblical and Talmudic Medicine*, ed. and trans. F. Rosner, New York : Sanhedrin Press.
- Girard, René, 1972, *La violence et le sacré*, Paris : Editions Bernard Grasset. (= 1982, 古田幸男訳『暴力と聖なるもの』法政大学出版局.)
- Richardson, Alan and John Bowden ed., 1983, *A New Dictionary of Christian Theology*, Philadelphia and London : Westminster and SCM Presses. (= 2005, 佐柳文男訳『キリスト教神学事典』教文館.)

- Shakespeare, William, 1908, *The Merchant of Venice*, London: Macmillan. (= 1967, 菅泰男訳「ヴェニスの商人」『シェイクスピア全集1 喜劇』筑摩書房.)
- Siegfried, André, 1959, *Les Voies d'Israël: Essai d'interprétation de la religion juive*, Paris: Hachette. (= 1967, 鈴木一郎訳『ユダヤの民と宗教——イスラエルの道』岩波書店.)
- Simmel, Georg, 1917 *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*, G. J. Goeschel: Sammlung Goeschel. (= 2004, 居安正訳『社会学の根本問題(個人と社会)』世界思想社.)
- Simoons, Frederick J., 1991, *Food in China: A Cultural and Historical Inquiry*, Boca Raton, Fla.
- Smith, William Robertson, 1923, *Lectures on the Religion of the Semites, 2nd ed.*, London: A & C Black. (= 1941-3, 永橋卓介訳『セム族の宗教 前・後編』岩波書店.)
- 田辺明子, 1989, 「原始キリスト教の会食礼——そのユダヤ教的関連において」『研究紀要』ブール学院大学, 28・29: 350-6.
- 谷泰, 1989, 「ノアの子孫の食卓——旧約5書における食規定の語り口分析」『季刊 人類学』京都大学人類学研究会, 20(4): 4-50.
- , 1997, 『神・人・家畜——牧畜文化と聖書世界』平凡社.
- , 1998, 「儀礼的殺害としての供犠の位置——ユダヤ・キリスト教世界での過剰解釈の残余」田中雅一編『暴力の文化人類学』京都大学学術出版会, 335-58.
- 立山忠浩, 2001, 「ルターの聖餐理解——Arzneimittel(薬)としての聖餐」『ルター研究』ルーテル学院大学, 7: 53-75.
- 東京神学大学神学会, 1983, 『旧約聖書神学辞典』教文館.
- Tuan, Yi-Fu, 1982, *Segmented Worlds and Self?: Group Life and Individual Consciousness*, Minneapolis: University of Minnesota Press. (= 1993, 阿部一訳『個人空間の誕生』せりか書房.)
- 内田芳明, 2008, 『ヴェーバー『古代ユダヤ教』の研究』岩波書店.
- Unterman, Alan, 1981, *Jews: Their Religious Beliefs and Practices*, London: Routledge & Kegan Paul. (= 1983, 石川耕一郎・市川裕訳『ユダヤ人——信仰とその生活』筑摩書房.)
- 臼杵陽, 1999 「イスラエルにおける宗教, 国家, そして政治——「誰がユダヤ人か」問題とその法制化をめぐる」『国際政治』121号
- Vassas, Cretian, 1994, *La bête singulière: Les juifs, les chrétiens et le cochon*, Paris: les Editions Gallimard. (= 2000, 宇京頼三訳『豚の文化史——ユダヤ人とキリスト教徒』柏書房.)
- Weber, Max, 1920, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, III, Tübingen: J. C. B. Mohr (= 2004, 内田芳明訳『古代ユダヤ教』岩波書店.)
- Wiener, Adolf, 1985, *Die juedischen Speisegesetze*, Breslau.
- 山口雅弘編, 2008, 『聖餐の豊かさを求めて』新教出版.
- 山本祐策, 1981, 「祭儀の構造と契約」『八代学院大学紀要』20: 89-102.

〈食〉の差異が、差異の表象を生むまで（小田）

要 旨

本論文では、食の差異から、差異の表象が生み出されるプロセスを考察する。いま、「差異の表象」が指示するものは、とくに人種についてである。異なる食習慣は、しばしば異なる〈人間〉の表象を生み出し、それらは知らずして差別と結びつきやすい。そうした過程を考えるうえで、ここでは、おもにユダヤ人の特異な食事の規定を題材とし、それが反ユダヤ主義とどのように接続されていたかについて焦点を当てる。反ユダヤ主義は、古代から現代まで連綿と続く人種主義のひとつの典型である。これらの考察を通して、根拠のない表象が、なぜわれわれにリアリティをもってしまうのか、ということを考える糸口としたい。

キーワード：食、反ユダヤ主義、表象、身体

Abstract

This article examines the process in which the representation of difference is generated through differences in food. What is the “representation of difference”? It is in particular the representation of Race. Different customs of eating sometimes manifest different representations of “human beings” and this is easy to connect to discrimination. This paper investigates the case of Jewish dietary laws and examines how they are connected to anti-Semitism. Anti-Semitism is a typical form of racism, which has continued from ancient times to today. Through this analysis, I will consider the reasons why such unreasonable and baseless representations continue to maintain their power over us.

Keywords : food, anti-Semitism, representation, body